

MONTHLY MAGAZIN

# EXTERIOR WORK

Exterior  
SpecialReport  
NewsRadar.News Shot  
Town Planning  
New Product etc.

エクステリアワーク

平成27年6月15日 第3種郵便物認可  
平成28年9月25日 発行  
通巻第209号 (毎月25日 発売)

2006

10

209号



- 海外のガーデンショーからデザインのヒントを得る  
チェルシーフラワーショーⅡ
- 美しいまちをつくる 第4回  
ドイツの壁面緑化 緑のチカラで都市再生
- 名工を訪ねて  
第8回 建具職人 谷口武一氏
- 流通の達人 経営理念を語る  
協和陶管株式会社 筒井信博社長



# 名工を訪ねて

科学の進歩が著しい現代、  
その裏で日本のものづくりの伝統が失われつつある。  
様々な技術の連続とともに、  
たくさんの人々の思いを紡いで今日まで伝えられてきた日本伝統の技を追う。



谷口武一氏  
略歴・代表作  
昭和14年5月生まれ。昭和23年、中学卒業後修行に入る。  
昭和30年に現在地で開業し、現在46年目に至る。全国大会で15回受賞。

「建具とは住宅や建築物の開口部に取り付ける仕切りである。開閉することによって人が出入りするだけでなく、光や風を取り入れたり、反対に風・雨・熱・音などを遮断するといった様々な機能を果たし、さらにその空間演出にも大きな役割を担う。商品としては、玄関のドアや室内ドア、障子、ふすま、窓やサッシなどが挙げられる。今回はこの建具職人である谷口武一氏を訪ねた。」

谷口氏は昭和14年生まれ。父親が器用で、木材ははつって色々な道具、例えば米や麦を打つ杵や線路の枕木などを作っていた。「父は1日に30から40本もの丸太をはつっていました。そして私にも、職人の方が一生懸命にやったら喜ばれるので、職人にならないかんとよく言っていました」。中学卒業後16才の時、父親のすすめもあって、地元建具店へ修行に出た。この地域では地元の和良樹の産地で建具業が盛んであり、名工が多かった。そうして修行を始めた谷口氏は、建具店で働きたがら、一月に2回程建築技術の日曜学校に通った。当時は監督者の2階で、職人の弟子のために技術講座があり、設計図などを勉強していたという。「休む人が多かったが、私は2年間ほとんど休まず通いました。建具の仕事は朝7時から10時間、12時間、もしくは朝までやっていたときもあります。弟子入りして住み込みで働き、兄弟子が厳しくて4ヶ月で家に逃げ帰ったこともありましたが、しかし、両親に説得されて戻りました。修行時代は板削りから始まって、2年目には便所の窓みたいな簡単な建具を作らせてもらうようになりました。その他、学校の建具などもやりました。私は同期の中では一番真面目にやりましたね。この仕事が好きだったし、いいものができるならうれしかった。仕事は厳しかったですが、そのおかげでどんなことでも耐えられるようになりました。今ではその経験がよかるから難しい」。注文ではデザインを任せられることが多い。「ある芸能人の方が京都にマンションを買った際に、雪見障子を作ってくれと直接電話で注文してもらいました。また、サッシが嫌いだから木の建具にしてくれと頼まれたときも家紋も彫ったりして仕上げたんですが、大変気に入っていただき、本当にうれしかったです」。そして、展示会に出展することも多く、現在では数え切れないほどの入賞経験を持っている。「地元岐阜県の建具展示会に出展して、上位入賞者は全国展に出してもらうことができますが、連続して12回ほど全国に出してもらっていました」。

そんな谷口氏が大和建設の仕事を始めたのは30年程前。「先代の渡邊幹夫さんとは同郷なので、そのよしみで数寄屋門の建具を作ってくれと頼まれて仕事をしました。あれは京都や富山でよく売れましたね」。

続いて建具職人としての心構えについて尋ねた。「建具の一番の根本は実用的であることです。とにかく使い勝手のよい、便利なものが一番で、見た目がきれいというだけではだ

ったと思えます。その店は仕事もたくさんあって結構繁盛していたので、お年玉として今でいうボーナスみたいなものももらっていました」。

16歳から7年間親方のところで働き、カンナといった道具を少しだけ分けてもらい22才で独立。「親方も一番かわいがってくれていたんで、独立したときも酒やら花やらを持って、遊びにきてくれました。独立した当時は仕事がたくさんあったので困ることはなく、3日間徹夜は当たり前でしたね。予定以外の他の仕事が入ってくることもあったが、断ることなく、休みを返上して仕事をしました。するとまた次の仕事が入ってきて、徐々に信頼を築いていきました。そういつた時期に、定時に通っていた弟が昼間に手伝ってくれたのでとても助かりました。そのまま会社を手伝ってくれて、今も一生懸命やってくれています。また、27才で結婚して以来、妻にも一生懸命働いてもらっていて、本当に感謝しています」。

現在は弟さんや息子さん、甥っ子など5人の職人で仕事をしている。「バラバラではなく、連携してひとつのものを作ります。身内でやっているのが気持ち通じやすく、やりやすいですね。息子は高校卒業後、設計士を目指して学校に2年間通い、2級設計士の資格を取りました。しかし、私に、職人になるわ」と言っていて、うちには入らず他の建具屋へ5年間修業に行きました。そして26才で実家に帰ってきてくれて一緒に仕事をしています。2級の設計士の資格を持っているので設計については任せる場合もありますね」。

販売は受注のみで、建具以外に、風呂桶なども作っている。「漆も塗りますし、もちろん家具も作れますよ。建具を作る人なら、大抵家具も作ることができます。家具の方が世話なくできます。それに比べて建具は全部見え

めですね。最近の注文でも、デザインよりも建具の使い勝手にこだわりのあるものが多い。そういった注文に応えながら、オリジナルなもの、建具にそんなものはないぞ、と言われるものを作っています。作ってみたら、お客様の評判がいいみたいです。使い勝手がよいものを作る技術が一番重要で、親方は教えてくれません」。

木製建具というからには、材料となる木材選びも大切である。材木の産地が近いこの地域は建具屋が多い。「和良樹の樹が結構いいんですよ。しかし、手入れをしないので、今はなかなかいい材木が入ってこない。通常は地移を使うことが多いですね。門に使用する材はきれいに目がそろっているものが必要なので外材を使うしかない。また、洗った純和風には洗った木というように、その場その場で合う材料を使わなければならない。技術が同じでも材質によって良くも悪くも見えます。材料を見分ける目が必要ですね。適材適所で使うようにして、自分の嗜好ではなくお客様に合わせた仕事をしなければならぬ」。

昔は仕事に困ることがなかった建具業界も、今はあまり仕事がないという。「やめる人も多く、跡継ぎもサラリーマンになってしまったりと、ところが多いですよ。始めたころはサッシがなかったため本当にたくさん仕事があったのでよかったです。今ではサッシが主流になりました。これからは建具だけでなく、風呂桶や家具なども作っていかなくてはなりません。うちは、息子が職人になると言ってくれました。あのときはうれしかったですね。うちで習いがてら手伝ってくれるのかと思ったら、よそで修行してくると行ってしまいました。今では自分が一生懸命にやると一緒に頑張ってくれます。安心して跡をまかせられますよ」と笑顔で語ってくれた。

「建具とは住宅や建築物の開口部に取り付ける仕切りである。開閉することによって人が出入りするだけでなく、光や風を取り入れたり、反対に風・雨・熱・音などを遮断するといった様々な機能を果たし、さらにその空間演出にも大きな役割を担う。商品としては、玄関のドアや室内ドア、障子、ふすま、窓やサッシなどが挙げられる。今回はこの建具職人である谷口武一氏を訪ねた。」

谷口氏は昭和14年生まれ。父親が器用で、木材ははつって色々な道具、例えば米や麦を打つ杵や線路の枕木などを作っていた。「父は1日に30から40本もの丸太をはつっていました。そして私にも、職人の方が一生懸命にやったら喜ばれるので、職人にならないかんとよく言っていました」。中学卒業後16才の時、父親のすすめもあって、地元建具店へ修行に出た。この地域では地元の和良樹の産地で建具業が盛んであり、名工が多かった。そうして修行を始めた谷口氏は、建具店で働きたがら、一月に2回程建築技術の日曜学校に通った。当時は監督者の2階で、職人の弟子のために技術講座があり、設計図などを勉強していたという。「休む人が多かったが、私は2年間ほとんど休まず通いました。建具の仕事は朝7時から10時間、12時間、もしくは朝までやっていたときもあります。弟子入りして住み込みで働き、兄弟子が厳しくて4ヶ月で家に逃げ帰ったこともありましたが、しかし、両親に説得されて戻りました。修行時代は板削りから始まって、2年目には便所の窓みたいな簡単な建具を作らせてもらうようになりました。その他、学校の建具などもやりました。私は同期の中では一番真面目にやりましたね。この仕事が好きだったし、いいものができるならうれしかった。仕事は厳しかったですが、そのおかげでどんなことでも耐えられるようになりました。今ではその経験がよかるから難しい」。注文ではデザインを任せられることが多い。「ある芸能人の方が京都にマンションを買った際に、雪見障子を作ってくれと直接電話で注文してもらいました。また、サッシが嫌いだから木の建具にしてくれと頼まれたときも家紋も彫ったりして仕上げたんですが、大変気に入っていただき、本当にうれしかったです」。そして、展示会に出展することも多く、現在では数え切れないほどの入賞経験を持っている。「地元岐阜県の建具展示会に出展して、上位入賞者は全国展に出してもらうことができますが、連続して12回ほど全国に出してもらっていました」。

そんな谷口氏が大和建設の仕事を始めたのは30年程前。「先代の渡邊幹夫さんとは同郷なので、そのよしみで数寄屋門の建具を作ってくれと頼まれて仕事をしました。あれは京都や富山でよく売れましたね」。

続いて建具職人としての心構えについて尋ねた。「建具の一番の根本は実用的であることです。とにかく使い勝手のよい、便利なものが一番で、見た目がきれいというだけではだ



都上八幡で行われた「谷口武一木こころ展」の案内



仕事はそれぞれが分担して連携しながら仕上げている



キメ細かい格子が素晴らしい自慢の作品



全国展で優秀賞に輝いた作品